

読売歌壇

小池 光選

朗らかに子らも大人も「お富さん」唄ひし頃の
昭和懐かし
日立市 鶴岡 育枝

【評】春日八郎のヒット曲「お富さん」。粋
な黒髪、見越しの松に……。歌詞の意味が全
くわからない。それでも大人も子どもも大
声で歌っていた。懐かしきかな、昭和。
寝る前に不登校の児つぶやけり「あした学校行
けたらいいな」
藤枝市 北泊あけみ

【評】哀切きわまりない歌。好き好んで不登
校しているのではない。行きたいが、行けな
い。思わずぼつりとつぶやく「あした学校行
けたらいいな」。本当に行けたらいいね。
孫が来てはあちゃんと呼ばれ二時間経過して
帰ればあちゃん終わる。つは市 岩瀬 悦子

【評】孫が来て「ばあちゃん」と呼ばれると
きだけ、ばあちゃんになる。あとの時間はま
だばあちゃんでない。成程、おもしろい。
自治会より敬老祝金届きシヨック受けつつお
金数える
宇都宮市 佐藤 順子

針に糸通らずまたもたしめる穴はあるかとふ
たたびみたび
仙台市 庄司 千鶴

秋晴れの空を見上げて深呼吸すれば私も宇宙の
一部
大阪府 木村由里亜

月曜のたのしみ歌壇俳壇をすべて読みたあ
うまいなあ
下野市 川中子とよ子

懐かしき友の名前を見つけたり里の祭りの奉納
額に
東京都 尾崎 永治

食ぶる人選ぶ果物さくらんぼをちさん似合はず
乙女相応し
東京都 杉中 元敏

秋の夜の時間をかけて万葉集を学ぶ楽しみは生
きる楽しみ
いわき市 佐川 義成

栗木 京子選

調べれば小蜜柑草という和名はびこる草にも
可愛き名のあり
山梨県 片田佐恵子

【評】小蜜柑草は蜜柑の形に似た赤褐色の蒴
果を結ぶのでこの名がついたようだ。キツネ
ノチャブクロという名もあり、こちらも愛ら
しい。「調べれば」に心がこもっている。
刈り残しし稲穂を集め孫たちともったいないの
教育実践
千曲市 柳沢 隆

【評】田植えや稲刈りの実習をする機会があ
るが刈り残した稲穂を集める体験は稀であ
る。まさに「もったいない」の教えを知るこ
とになる。祖父と孫の交流がすばらしい。
集会所天下分け目の合戦が谷戸に鴉の声満ち満
ちて
鎌倉市 荒井美知子

【評】谷戸は丘陵地が侵食されてできた谷状
の地形。鴉たちは鎌倉の歴史の厚みを感じ
ながら鳴いているのか。上句の発想が愉快。
老々の介護甲斐無く君逝きて呼び紐今も手に巻
き眼る
大阪市 酒井 真夫

来る人もすくなくなった縁台でスーパーブルー
ムーン夫とながむ
いすみ市 竹下 和江

平均の年七十二の四姉妹たまに呼び合う若草の
名で
鎌ヶ谷市 藤本 嗣子

目標はJAXAに売りに行くこと部品会社に
内定せし子は
碧南市 江原 冬莉

屋久島の旅のさなかのワンシヨット種子島から
あがるロケット
川崎市 大平真理子

やりがいも危うき時代か叩かれて仕事が増える
教育現場
山形市 佐藤 紀之

仕出し屋のパートは早い朝の四時寝返り打てば
妻はもう居ず
真庭市 小谷 義孝

依 万智選

撮るためにどんどん下がっていくひとの地平線
みたいに薄靴
川崎市 からすまあ

【評】集合写真なのか、背景をもっと入れたら
いいか、カメラを持つ人が後ずさる。その足元
の動きが地平線をなぞる。いつか靴の厚みは
線と化し地平線そのもの。的確な描写
からのダイナミックな視点の転換が魅力だ。
ゆっくりでいいよと思いつつ鳴らす一人暮らし
の父のケータイ
平塚市 小林真希子

【評】呼び出し音に慌てる父の姿を思い浮か
べ、思いやる。鳴らすところから、もう心の
会話は始まっている。
吸い過ぎは毒だと写真に言い聞かせ好みの煙草
二本だけ置く
東京都 伊藤 直司

【評】写真は遺影だろう。もう思いきり吸わ
せてやってもいいのだが、そうしないところ
に、生前の思い出や作者の愛情が滲む。
吹き出しを一行ずつに小分けしてきみのライン
はずじ雲のよう
上尾市 関根 裕治

十五年前までありし湯屋の地に鈴虫鳴けり番台
辺り
柏市 塩田 淳文

親ゆびと人差しゆびがあちこちでフライドひ
らく雷の午後
東京都 浅倉 修

親指を突き入れて割るさくらたあなたに寝め
てもらいたかった
朝霞市 桐島 あお

左手にカーナビ操作する君の押し間違えたその
海へ行こう
那珂市 粕谷みのり

入院の妻への連絡メールにいつも以上のやり
とりのをする
金沢市 酒井 正二

「電源を切ります」と言うオープンに「勝手に
しろ」と返す秋の夜
大阪市 原 拓

黒瀬 珂瀾選

茶罷待つ間に無理強ひさるる清め酒老衰の死に
何を清めん
福島県 黒沢 正行

【評】死は決して、穢れではない。人生を充
分に生き抜いて旅立った人の死を、なぜ「清
め」ねばならぬのか。死は、生と同じく、尊
いもので、忌むべきものでない。
角打ちの酔ひを醒まさむ堀端の風に吹かるる秋
の夕暮れ
瑞穂市 渡部 芳郎

【評】いいですね、この酔いどれ風情。立ち飲
みの酔いを水匂う風に吹かせる。こんな何気
ない日々季節は巡りゆく。店先で酒を飲ま
せる角打ちのある街に住む作者が羨ましい。
放課後になるまで座るブランコの隣ばかりを揺
らす秋風
大郡山市 大津 穂波

【評】孤独を受け止める、切実な一首。一人
ブランコに座る時間、だが隣には誰も座ら
ず、ブランコを揺らす風も私を避けるのだ。
ごみ出しの帰りのわれをくつきりと朝日はとら
ふ歩道の上に
松戸市 山田 好司

その白を損なわぬまま沙羅は落つジュリアン・
ソレルは老いを知らない 相模原市 三隅美奈子
どろどろにひかりの群れが溶けている銭湯は裸
眼にて入る場所
金沢市 岸 桃子

奥さんの字とすくわかる品書きの青椒肉絲にま
るっこいルビ
豊中市 葉村 直

知り初めし頃は方言丸出しの愛しの君を院に見
舞いぬ
横浜市 山本喜太郎

杖でなく我が肩頼り立ち上がる妻も高齢つくづ
く思う
田川市 原田祥二郎

幾つかの病のあれど前向きにねばげ生きん納
豆のごと
福岡市 古賀 悦子

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌(俳)壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから ◇毎週月曜日に掲載 右の影絵はしそのみ